

青年期における子どもから大人への自認変化と 自我同一性との関連

○宮内結城¹ 武田知也¹

(人間環境大学総合心理学部総合心理学科)

問題

厚労省が定めたライフステージにおける青年期である 15～24 歳にあたる人々の自認は大人なのだろうか、子供なのだろうか。高校生にあたる 15～17 歳はまだ自認が子供であると言えるかしないが、法務省が定めた成人年齢を満たしている満 18 歳以上の人々はどうか。辞書の定義として大人とは成人であるから、成人年齢を満たしている 18 歳以上の人々は大人であると言うべきであるが実際に成人年齢となったからといって自認も大人であるかは疑問である。

ではどうすれば自認が大人となるかについて、Erikson(1959)が思春期の発達課題として提示したアイデンティティ発達課題に着目した。Erikson は自我同一性(アイデンティティ)の発達を思春期の課題としており、加えて Erikson は”自我が確実な集団的未来に向かっての有効な方法を学んでいるという確信、すなわち、自我が特定の社会的現実の中で定義されている自我へと発達しつつある革新へと自己評価(self-esteem)が成長している感覚を自我同一性と呼びたいと思う”(Erikson 1959, ; Erikson, 1968)としており、いわば自我同一性の発達は自分が発達していることへの自己評価であると考えられる。この発達の自己評価と自認において自らを大人と考えるかという 2 つの思考の関連について検討した。また、自認の理由を問い、カテゴリーで分類することで自認変化の要因となる要素の把握が可能と考え自由記述による調査も検討した。

方法

対象 大学生 103 名(男性 25 名女性 74 名その他 4 名)を対象に調査を行った。平均年齢は 19.3($SD = 0.8$)歳であった。

調査材料 大人の自認を尋ねる質問(「あなたは自分のことを大人だと思いますか」)、そして多次元自我同一性尺度(MEIS(谷, 2001))を実施した。

統計解析 まず、大人であると自認した群を大人群、大人でないと自認した群を子供群とした。そして、大人・子供群を独立変数、MEIS を従属変数とした対応のない t 検定を実施した。

なお、解析には HAD を使用した。

また、大人、子供の自認について尋ねた自由記述に対し、大学生 4 名による KJ 法を行いカテゴリーに分類した。

結果

大人、子供の自認を独立変数、MEIS 得点を従属変数として、対応のない t 検定を行った。その結果、MEIS の 4 概念のうち心理社会同一性の項目のみが $p < 0.10$ で有意傾向だった(Table1)。また、得られた自由記述の KJ 法による分類の結果、大人群では年齢、責任のカテゴリーに該当する回答の数が多く、子供群ではメンタル、自立のカテゴリーに該当する回答の数が多かった。また、知識、見た目のカテゴリーは子供群でのみ確認された。

Table1 対象者の記述統計

	全体	大人	子供
性別 (男/女/その他)	103 (25/74/4)	36 (10/26/0)	67 (15/48/4)
年齢	19.3 (0.8)	19.4 (0.8)	19.3 (0.9)
自己同一性・連続性	20.2 (7.1)	20.2 (6.7)	20.3 (7.4)
対自的同一性	18.4 (6.7)	19.5 (6.5)	17.9 (6.8)
対他的同一性	16.8 (5.7)	17.1 (5.9)	16.6 (5.7)
心理 社会的同一性	18.0 (6.7)	19.7 (6.2)	17.1 (6.8) *

Table2 KJ 法の結果

組み分け名	メンタル	自立	年齢	責任	知識	見た目
大人	3	18	17	6	0	0
子供	22	34	4	4	7	1

考察

MEIS の結果、大人群と子供群では心理社会同一性に有意傾向が認められた。これは社会で定められた基準や規範によって大人と自認するためかもしれない。KJ 法においても大人群において年齢を理由とする回答が多く、社会との関係において大人、子供の自認が決定されている可能性が示唆された。

引用文献

谷 冬彦 2001 青年期における同一性の感覚の構造—多次元同一性尺度(MEIS)の作成—教育心理学研究. 49,265-273